



九州歯科大学 図書館だより

NO.69



とりわけ寒く感じられた冬も過ぎ去り、ようやく春になりました。私が一番好きな季節ですが、終わりと始まり、別れと出会いのある、ドラマティックな季節でもあります。これまでの自分に区切りをつけ、新鮮な気持ちで再出発できる時でもあります。こんな時に、ぜひ図書館に立ち寄ってください。選書ツアーおススメ本の紹介にあるような興味深い本を手にとって見て下さい。きっと新しい発見があることと思います。

図書館運営部会 松尾 拓

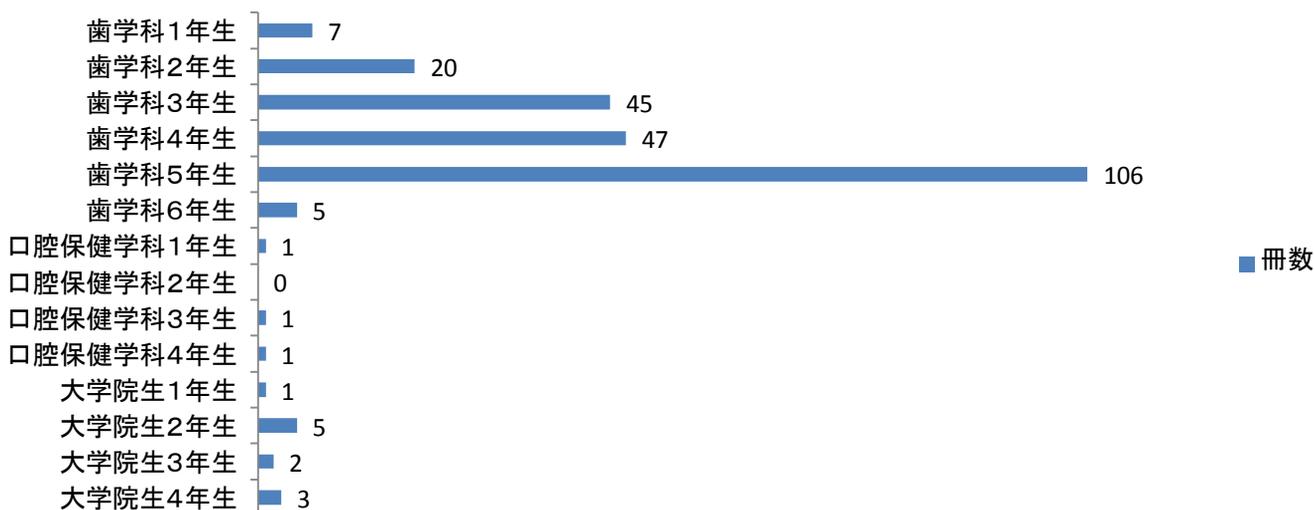
貸出ランキング

2016.2

- 1位 コア歯科理工学 / 小倉英夫, 高橋英和, 宮崎隆, 小田豊, 榎本貢三, 小園凱夫編; 遠藤一彦 [ほか] 執筆
- 2位 代謝系の疾患と薬; 内分泌系の疾患と薬; 産婦人科系の疾患と薬; 血液系の疾患と薬; 免疫・炎症・アレルギー疾患と薬; 眼・耳・皮膚の疾患と薬 / 医療情報科学研究所編集
- 3位 シンプル薬理学 / 野村隆英, 石川直久編
- 4位 循環器 / 医療情報科学研究所編
- 5位 血液 / 医療情報科学研究所編
- 6位 基礎 / 加藤和英著
- 7位 嚢胞・腫瘍; 症候性疾患; 唾液腺疾患; 神経疾患; 血液疾患 / 麻布デンタルアカデミー編
- 8位 歯科矯正学 / 麻布デンタルアカデミー編
- 9位 小児歯科学 / 高木裕三, 田村康夫, 井上美津子, 白川哲夫編; 高木裕三 [ほか] 執筆
- 10位 口腔外科の疾患と治療: SIMPLE TEXT / 栗田賢一, 覚道健治編集; 覚道健治 [ほか] 執筆



貸出冊数(2月)



選書ツアーおススメ本の紹介



仏果を得ず 三浦 しをん

人形浄瑠璃である文楽の太夫に人生をかける青年を描いた小説です。芸の世界を通して懸命に生きる若者の姿を清しく描き出しています。文楽についての知識がほとんどありませんでしたが、読んでいてかなり引きこまれました。非常に心地よかったです。主人公の目標に向けて努力する真っ直ぐな行動と芸の世界とのかかわりが読んでいて、何の職業にも相通ずるものがあると感じました。三浦しをんの作品としては「風が吹いている」と同じくらいお勧めです。



世界から戦争がなくなる本当の理由 池上 彰

2015年は戦後70年に当たりますのでこの本を選びました。著者はわかりやすいニュース解説で有名な、TVでよく見かける池上彰さんです。この本も評判に違わず、実にわかりやすく、スラスラ読めました。第1章は日本がなぜ戦争をしたのか、そしてその後の平和国家の歩みが解説されており、特に日本に対する韓国と中国の態度の解説は溜飲を下げてくれました。第2章以降はアメリカ、ヨーロッパ、中東、東南アジアなど各地の紛争が解説されており、その理由が世界史を知らない私でも理解できました。世の中には左翼、右翼がありますが、この本の内容はニュートラルだと思います。また、この本を読んでいくと、最後に出てくるバックミラーに映る風景から未来を予想することの重要性が納得できます。



生存者ゼロ 安生 正

中部アフリカのガボンで、ウイルス学者の富樫がエボラ出血熱を思わせる感染症で妻と子どもを亡くすところから物語は始まる。その二年後、北海道根室半島沖の石油掘削基地で職員全員が無残な死体で発見され陸上自衛官の廻田と富樫は政府から大量死の原因究明と被害拡大を阻止するように命じらる。冒頭にアフリカで感染症によって家族が死んだエピソードがあるので、北海道で起こる事件も同じような感染症が原因だろうとってしまうのだが、その原因はかなり驚くべきものであった…。海の上の小さな基地だけにとどまらず、パンデミックは北海道本島に上陸して瞬く間に道東が壊滅、惨劇は札幌に迫ることとなる…。失意の末に精神に歪みが生じ始めている富樫と、冷静で無骨な自衛官廻田の他、かつて富樫を陥れて今は出世している国立感染戦勝研究所の部長鹿瀬、優秀な美学生物学者弓削も登場し、医療サスペンスの一面をもちつつの、謎の生物との互いの生存をかけた闘いというパニック冒険小説でもある。発想と物語自体はとっても面白いし状況の描写などはとても迫力があると思うが、パンデミックを引き起こすものの正体や対策法、人物や心情の描写については少々雑だと思われるところもあり…。気分転換にみるアクション映画のような感じで楽しむ小説だと思った。

ただ、興味深かったのは、この小説の元のタイトルでもあり、物語の中でも象徴的に扱われている「下弦の刻印」。次の新月に向けた終盤でもあり序章でもあるということからも、ある種の生物間の世代交代(?)的な滅びと繁栄を象徴するものとして登場しているのではないかと思う。とすれば、主人公の一人が最後のシーンにある場所に導かれたことにも意味があって、物語は序章からずっと続いており、文章が終わってなおも続いて人類は滅びという結末に行き着くのであろうか…と考えた。



嫌われる勇気 岸見 一郎 古賀 史健

そもそも私たちは、「嫌われたくない」と思いながら日々を過ごしている。にもかかわらず、嫌われる勇気を持つことを勧めるのはなぜなのだろう。そんな疑問を持ちながら、作者の幸せの定義の価値観に惹きつけられ読み進められる一冊です。